



石けんのないとき、何を使って汚れを落とすの

灰汁（あく）を使って、汚れを落とす

石けんのない時代には、おもに灰汁（あく）を使って洗たくをしていました。灰汁は、灰を水にひたしたときにできる、上ずみ液です。アルカリ性で、洗たくや染め物に使われてきました。そのほか、木の実や、米のとぎ汁、アズキの粉なども使われました。

ずっと昔のころの洗たくは、水の中に衣類をひたし、水の中で衣類をもんだり、足でふんだり、また、棒でたたいたりしていました。洗たく物を川に持っていき、衣類を水にしずめ、足でふみ洗いし、それをよくしぼってから、川原に広げて干したのです。

日本でも古くから川や湖のほとりで、洗たくをしていました。日本では、衣類を丸洗いせずに、衣服をほどいて洗っていました。その後、井戸をほる技術が発達すると、洗たくは、井戸のそばで行われるようになりました。さらに、いろいろな洗たく道具が生まれ、たらい、ひしゃく、洗たく板、手おけなどが使われるようになりました。そのころは、たらいと井戸水を使った、もみ洗いが中心でした。

洗たく機が、いっぱんの家庭でも使われるようになるまで、洗たくの方法はあまり変わりませんでした。

石けんの始まり

今から約5000年前に、シュメール人たちは、木を燃やしてできた灰を使って、衣類についた油を落とす方法を考えました。その後、動物の肉を焼くときに油を灰に混ぜると、石けんができることを発見しました。これが、最も古い石けんの記録といわれています。（監修・田代 脩）

